

木曾川



特集・木曾川源流の里・木祖村

木曾川文庫は治水の資料館。
水の大切さや恐ろしさを歴史から学び、
これからの治水を、
皆様とともに考えていきたいと思っています。
今回は木曾川の源流の里・木祖村を特集。
村の歴史に見る水と森の関わりや
現在進行形の事業をクローズアップします。
また、今回の輪中特集では、
輪中の人々の暮らしにスポットをあてていきます。

INDEX

ふるさとの街・探訪記(木祖村)

◆清流の源に新しい風が吹く

AREA REPORT

◆中部を支える木曾三川の水

面白WATCHING

◆夏の日差しに誘われて、
森と泉のリラクゼーション。

歴史ドキュメント

◆豊かな穀倉地帯を形成した輪中の足取り

TALK & TALK

◆輪中地帯の水防意識とその精神性

民話の 小箱

◆神祇様の霊水

清流の源に新しい風が吹く

自然の要塞 鳥居峠

木曽路はすべて山の中である。と記したのは明治の文豪、島崎藤村。その言葉どおり、山々の深緑に囲まれた木曽村は、深い静寂と安らぎに包まれた谷あいの村。木曽川の大いなる流れの源を発する源流の里でもあります。まるで季節を告げる風の匂いのように、ゆつくりと、しかし少しずつ表情を変えながら、時を重ねてきたこの村も、近年では、日曜両家の村、自然をベースにした高原リゾートの村といった新しい表情を創り出そうとしています。

木曽村は、周囲を二千メートル級の山々に囲まれた谷あいの里。夏は涼やかな風が吹き、冬は一面の銀世界。四季折々の風景は、多くの文人や画家にも愛された詩情豊かな風情をたたえています。また、この地は木曽川の源流地帯にあたり、村の約96%が山林であるにもかかわらず、古くから交通の要衝で、平安時代には京と信濃・東国を結ぶ重要路線として、多くの人々の往来で賑いました。中でも、太平洋側と日本海側の分水嶺、標高千九百九十七メートルに位置する県坂（現在の鳥居峠）は、和銅年間に開かれた吉蘇路の峠道として古代から利用されていたと言われています。戦国時代には、重要な戦略上のポイントとしての役割を果し、木曽防衛の第一線となりました。天文十八年（一五四九）には木曽義仲の末裔とも言われる木曾氏が武田信玄勢を、天正十年（一五八二）には甲州勢を、いずれも鳥居峠で撃破。険峻な地の利を生かした攻撃が功を奏したのでした。



▲石だたみの木曽路



▲株祭之図

▼木祖村



江戸時代初期、中山道が五街道の一つとして定められ、その宿場町としてにぎわった藪原は、木曾十一宿の中でも最も多くの大名が宿泊したという記録が残されています。大名の敬遠する川止めがなかったことや風光明媚な木曾谷が好まれたことから往来も盛んになったようですが、「木曾のかけ橋太田の渡し鳥居峠がなかよかる」と謡われたように、街道きつての難所でもありました。

中山道の宿場町 藪原の発展

その反面、当時の人々の暮らしは決して豊かなものではありませんでした。生活の糧であった豊かな森林資源は、尾張藩の厳しい管理体制下に置かれ、禁を破った者には厳重な処罰が加えられたのもこの頃です。

文明開化から 現代まで

版籍奉還、廃藩置県と、明治維新を迎えて、目まぐるしい変貌を遂げた日本。この地区もその例外ではなく、明治七年、長野県の所管となった小木曾、藪原、菅村の三村が合併して、木祖村となりました。山々は、官有と民有に区分けされ、明治二十二年には、官有は皇室御料林に。第二次世界大戦後には、国有林とされました。一方、交通面での変化も目覚ましく、昭和三十年、藪原〜奈良井を結ぶ国道19号に鳥居トンネルが開通。これによって、立ち遅れていた交通運輸難が大きく解消されました。その後、交通量の増加に伴って、新鳥居トンネル、藪原バイパス、小木曾バイパスも完成。道路網の整備は木祖村の経済、文化を飛躍的に向上させました。現在では各種レクリエーション施設の充実や日曜画家の村としてのイメージ作りなどが積極的に行われる一方で、古くからの伝統工芸や行事の保存にも力が注がれています。新旧の流れが融合し、新たな魅力を開花させようとしている木祖村は、目前に迫った味噌川ダム完成を契機に、さらなる飛躍と変換の時代を迎えようとしています。



▲鳥居峠山頂の石仏たち



▲お六櫓づくり

木祖村の伝統工芸

◇お六櫓

お六櫓は、ミネバリやツゲを用いた木櫓。中山道の名産品として広く知られています。江戸時代、妻籠宿に住んでいた娘おろくが、患っていた頭痛を悩み、御岳山に願をかけたところ「ミネバリの木で櫓を作り、それで朝夕に髪をすけば、必ず直るだろう」というお告げを受けて作ったのが始まりだと言い伝えられています。素材を生かした独特のつや、しつくりとなじむ肌ざわり、三代使えるという丈夫さが三百年間愛され続けた理由です。今では機械化も進められていますが、その独特の風合いを味わうのなら、やはり手作りです。熟練された職人の腕と勘を必要とする手挽き技法は、村の無形文化財として指定されています。

治水治山に尽力した

材木奉行・市川甚左衛門

木祖村の最北端にある鉢盛山に源を発した木曽川の豊かな水は、この地を有数の美林に育て上げました。一六〇〇年、関ヶ原の合戦に勝利した徳川家康は、木曾の豊かな山林にいち早く目をつけ、木曾を天領と定めました。そして、一六〇五年には、尾張藩領に。当時、耕地が少ないこの地では、年貢の代わりに木材を切り出して幕府に献上。木材の搬出に人足を勤めることもこの地に住む人々の重要な義務でした。しかし、これによる過伐がたつて山は荒廃。木曽川下流域にも洪水による被害をもたらしました。そこで、尾張藩は一六六五年、材木役所を置き、材木奉行を任命。本格的な山林保護に乗り出したのです。中でも享年年間、木曾の材木奉行を勤めた市川甚左衛門は、それまで木材で納めていた年貢木の制を廃止し、一般住民が立ち入ることを禁じた留山、鷹狩りに重要な単鷹が発見された巣山、それ以外に人々が自由に出入りできる明山の三大区画を制定。ヒノキ、サワラ、コウヤマキ、アスナロ、ネズコの五木は、明山においても伐採を禁止するなど、数々の政策を行いました。木曾谷の人々にとっては、過酷とも思われた保護政策でしたが、彼の行った傾斜地の新墾の禁止、植林、厳重な監視などは、山腹の崩壊を防ぎ、治山治水に大きく貢献。今日、木曾がわが国の三大美林と称せられるのも、市川甚左衛門の力に負うところが多いとさえ言われています。

源流の村・木祖村では、味噌川ダムを建設中

中部を支える木曾三川の水

広大な流域面積をもつ木曾川は我国屈指の大川。その恩恵は、遙かいにしへの時代から現代まで、中部圏の発展を根底から支えるほど大きなものであります。今後も活力に満ちた快適な地域を作り上げていくために、そして、21世紀のさらなる飛躍のために、木曾三川における水資源の開発はなくてはならないものです。治水と利水という大きな目的のもと、安全でうるおいのある国土の形成が、着々と遂行されています。



活力ある快適な地域づくり

味噌川ダムの概要

木祖村では、木曾川総合開発の一環として、味噌川ダムの建設が急ピッチで進められています。大半が山林であり、水源地域としての安定性を備えたこの地は、ダム建設には最適な立地条件です。

昭和四十八年四月に実施調査が開始されて以来、工事は大詰めの段階で、具体的には、平成四年度末で80%の工事が進んでおり、平成七年の完成に向けて、後は、ダムの天端道路と周辺整備を残すのみとなっています。

その規模は、堤高百四十メートル、総貯水容量六千万立方メートルのロックフィルダム型式。このダムによって、ダム地点計画高水のピーク流量650m³/秒のうち、550m³/秒の洪水調節を行



上下:味噌川ダム

うことが可能です。また、木曾川の既得用水の補給など、流水の正常な機能の維持と増進を図り、新規取水された水資源は、岐阜県内、愛知県内の都市用水として、また長野県では最大出力4800kWの発電が行われる予定であり、大切な水資源がより有効に使われることでしょう。

木祖村ではこのダム建設を契機に、下流圏との人的、経済的交流を深め、治水・電力だけでなく、周辺道路整備や観光面など、その波及効果に大きな期待を寄せています。

中部圏と木曾三川の関わり

日本の主要水系は大きく分けて七つに分かれます。木曾川水系は、利根川、淀川、築後川に次ぎ4番目に水資源開発促進法による指定水系(昭和43年)となっています。木曾川水系とは、木曾、長良、揖斐の主要幹川からなり、中部圏の根幹を支える資源です。農業立国であった日本の利水は、かねてより灌漑用水を中心とする歴史でありました。

その一方、明治期から始まった電燈の普及、産業への電力の利用が急速に進むにつれ、水力発電開発が目覚ましく躍進。灌漑用水との紛糾も生じましたが、戦後の復興期には国土の保全、水力開発を目的とする「国土総合開発法」が制定され、中部圏では昭和三十年に愛知用水事業が着手されました。またこの頃から、産業の発展や人口の集中によって都市用水の需要が急増。利水の中心は、次第に灌漑用水から都市用水へと移行していったのです。



岩屋ダム



木曾川用水(木曾川大堰)



長良川河口堰

木曾三川における水資源開発

多様化し、増大する水資源の需要に対応するため、昭和四十三年十月「木曾川水系水資源開発基本計画」が定められました。この計画は、水道用水、工業用水、農業用水の確保と補給、洪水調節、流水調節などを目的に、木曾川総合用水、三重用水、長良川河口堰建設が盛り込まれた総合的、体系的な水資源の開発計画です。昭和四十八年三月に全部、昭和五十七年三月に一部、平成五年三月に全部変更が行われています。

現計画では、目標年次を平成十二年とし、需要想定に示す各県の新規水需要量34m³/秒の確保を行うことにしています。

平成12年における需要想定(木曾川水系)(単位:m³/秒)

	長野	工業用水	農業用水	計
長野	0.02	—	0.1(0.03)	0.12
岐阜	4.7	1.8	6.6(1.0)	13.1
愛知	7.7	3.7	4.4(2.3)	15.8
三重	1.5	0.5	2.1(0.1)	4.1
合計	13.8	6.0	13.3(3.5)	33.1

注) 1. 水道用水及び工業用水の水量は、年間最大取水量を表す。
2. 農業用水の水量は、夏期かんがい期間の平均取水量を表す。ただし、()は冬期かんがい期の平均取水量を表す。

ダムの構造と機能

ダム築造の歴史は古く、古代アッシリアやエジプトにまで遡ります。その役割は、河川や溪谷を堰き止めて水を貯え、土地の保全、灌漑、発電、治山治水などを行うこと。事業別には、水道、灌漑、発電、砂防用など、さまざまなものがありますが、経済の発展にともなう、今日では一個のダムを多目的に使うことが増えていきます。その種類は、構造材料からも分別することができ、コンクリートによる重力ダム、アーチダム、バットレスダム、中空重力ダム、土砂を利用したアースダム、岩石のロックフィルダムなどがあり、地形、地質に合わせて作られます。ちなみに、木曾川水系に完成もしくは建設中の岩屋ダム、阿木川ダム、味噌川ダム、徳山ダムはいずれもロックフィルダムです。比較的lowコストでの建設が可能で、工法の発達によって耐久性も大幅に向上。近年、注目のダムと言えるでしょう。

●味噌川ダム(ロックフィルダム)標準断面図



利用したアースダム、土砂を石のロックフィルダムなどがあり、地形、地質に合わせて作られます。ちなみに、木曾川水系に完成もしくは建設中の岩屋ダム、阿木川ダム、味噌川ダム、徳山ダムはいずれもロックフィルダムです。比較的lowコストでの建設が可能で、工法の発達によって耐久性も大幅に向上。近年、注目のダムと言えるでしょう。



ファミリー・ヘルシーパーク

夏の陽ざしに誘われて 森と泉のリラクゼーション。

木立が造る魔法のトンネル。ここには夏でも、心地よい涼風が吹いてきます。小鳥のさえずりを道標に、歩き出せば、清らかな川のせせらぎ、透き通った水を両手で受け止めれば、自然が身体の中へとゆっくり染みこんでいくようです。灼けたハートをひんやり冷ましてくれるのは、森と泉のシンフォニー。透明な自分に戻れるとっておきの一日を見つけました。

レジャーゾーン

1 こだまの森

巨大迷路ランズボローメイズ、キャンプ場や野外音楽堂などが揃った村営レクリエーション施設。パターゴルフやテニス、フィッシングなど、アクティブライフを満喫できます。中でも人気は、プチ別荘風ケビンでの宿泊。緑の風に包まれた森林浴で身も心もリフレッシュできそうです。

2 やぶはら高原スキー場

ファミリー向けのコースから最大斜度34度を誇る上級者向きチャンピオンコースまで、幅広い層

に人気のスキー場。スノーボードの滑走も可能です。美しい眺望を楽しみながら、華麗なシニールを描いてみては？

3 ヤマメ・イワナ釣り

木曾谷は有数のフィッシングポイント。笹川や味噌川ではイワナやヤマメの溪流釣りが、木曾川本流では醍醐味満点のアユの友釣りも楽しめます。上流の冷たい水で育った川魚は、身の引きしまりかたも抜群。きつと一味違うはず。

カルチャーゾーン

1 宮川資料館

表は、昔ながらの漆器店。しかし、一步土蔵に入れば、そこはまるで江戸時代にタイムトリップしたかのよう。ここは、天明七年から昭和の初めまで、六代にわたって藪原宿で医業を営んだ宮川家。土蔵を資料館として開放し、江戸時代の医療器具を初め、刀剣、学問書、書画など、先祖代々の遺品が展示されています。

3 木祖村郷土館

旧民家風のアンティークな館内には、鳥居峠と中山道に関する資料、農具・山樵用具など、江戸時代からの民俗資料が豊富に集められています。観光シーズンには復元された仕事場でお六櫛の製作実演も。往時の木曾の人々の暮らしが偲べれます。

4 極楽寺

見どころは小堀遠州の流れを組むと言われる日本庭園。雪舟、円山応挙、藤田嗣治らの書画なども所蔵されており、日本の美をたつぷりと堪能できます。また、この寺で伊藤左千夫、斎藤茂吉らが修養。アララギ派の基礎を作ったというエピソードも。

こだまの森



2 木工文化センター

全国のキャンパスの約70%を生産している木祖村は、日曜画家の村。木の香りいっぱい、木工文化センターでは、画廊、アトリエなどが設けられ、アマチュア画家たちが筆を存分にふるっています。

木祖村を彩る季節の祭り

藪原神社祭礼(藪原神社)

—7月8・9日—

古い歴史を誇る藪原神社の祭礼。古式ゆかしく村中を練り歩いて奉納される神楽やみこしは見たえもたつぷり。中でも、ひときわ目を引くのが豪華な屋台。上町の屋台(雄獅子)と下町の屋台(雌獅子)がすれ違う“よけ合い”が勇壮に行われる。祭りは最大のクライマックスを迎えます。この日は、近隣の村や町からも大勢の人々が繰り出し、その賑いぶりは木曾の三大祭のひとつに数えられています。かつては、人々の数少ない楽しみでもあった年に一度の祭り。今後も大切に伝承していきたい行事の一つです。



鳥居峠わらじ旅(旧藪原宿周辺)

—9月初旬—

村ではすっかりおなじみとなったユニークなイベント。明治のハイカラさんや江戸時代の旅姿など、各々趣向を凝らした衣装に身を固めた参加者が旧藪原宿を練り歩きます。この日ばかりは、大人も童心にかえって、大はしゃぎ。途中二か所の休憩所では、お団子や綿飴もふるまわれ思わず笑顔がこぼれます。誰もが、時代劇の主人公になれる一日です。



主・な・観・光・行・事

行事	期間
木曾川源流全国いわな釣競技会	5月中旬~下旬の日曜日
芭蕉を偲ぶ鳥居峠俳句大会	6月中旬
木曾川源流やぶはら高原マラソン大会	7月中旬の日曜日
こだまの森おもしろオリンピック	10月10日
全日本日曜画家中部日本大会	10月



木祖村郷土館



木工文化センター



極楽寺



藤田嗣治の天井画と掛軸



やぶはら高原スキー場



宮川資料館



ヤマメ・イワナ釣り



木祖村への交通

- 電車利用
名古屋 ~~~~~ 中央本線で 95分
木曾福島乗り換え ~~~~~ 中央本線で 15分
JR藪原
- マイカー利用
R19
中央自動車道・中津川IC ~~~~~ 藪原 90分

豊かな穀倉 地帯を形成した 輪中の足取り

まばゆい夏の陽差しを浴びる輪中は、中部圏有数の水郷地帯。今では青々とした稲穂が揺れる田園地帯にも、先人たちの苦難の道のりがありました。泥をかき上げ、田舟を繰り、くね田を耕していく…。海抜ゼロメートル地帯の土地利用は、まさに水との闘いの歴史。そこで今回は、輪中の農業と排水対策の歴史を特集します。



田舟で食事する人たち (昭和43年ごろ、河合孝氏撮影)

輪中地域の土地開発

江戸時代初期に輪中がはじめて形成されたから、周辺の低湿地が新田開発されるようになり、輪中の増加、拡大が進みました。しかし一方では、洪水による堤防破壊だけではなく、輪中内にたまる悪水にも悩まされ続けてきたのです。それは木曾三川をはじめとする緒川が、土砂を河道に堆積し

て河床を高くするため、年ごとに悪水の排水が困難になり、悪水停滞によって作物に水腐れが生じ、苦勞の末に新田開発した耕地も、低湿地に逆戻りする有様でした。こうした悪水への対策として、悪水路の開削や堀田の造成が行われました。

掘上げ田と掘潰れ

低湿地の生産性を高めるため耕法として江戸後期から明治にかけて始まった土地利用形態が掘田方式でした。

掘田とは、沼田の一部の土を掘り上げて田面に盛土することによって出来た掘上げ田と、掘った部分に出来た短冊状の池沼（掘潰れ）の総称です。掘上げ田と掘潰れの比率は地形により様々ですが、掘潰れ比率の高い掘田を田舟型、少ないのを孤立型と分類し、輪中地域の高位部から低位部に向かって孤立型←田舟型の順に分布しています。



めんつけ (昭和43年ごろ安八町、河合孝氏撮影)



掘田 (昭和43年ごろ海津町・河合孝氏撮影)



耕地整備後の現況

くね田

低湿地で裏作を行う場合、掘上げ田にさらに高畝を作る必要があります。つまり高畝の上に高畝を作ることになり、この高畝はくね田と呼ばれました。



くね田づくり

くね田は大正時代中期から始まりましたが、稲を刈りとった冬期に、引き鎌、撥先備中鍬などを使って開墾され、菜種、麦類、じゃが芋、豆類などが植えつけられました。くね田作りは

主に婦人労働でしたが、「嫁殺し」といわれるほど、辛い仕事でありました。

輪中内の悪水排除

輪中堤が形成され、懸廻堤が築造されるようになると、内水排除が大きな課題となってきました。連続堤は大水時に堤内への土砂の堆積を食い止めますが、堆積は堤外地においてのみ進行。川床は年々高くなり、輪中内の悪水を堤外の河川に排水することが困難になるからです。これを解決するために、悪水路の下流部への延長（江下げ）を図りましたが、自然排水に頼っていた江戸期では、干潮時でない樋門が開かず、あまり効果がありませんでした。中でも輪中内の輪端部（下郷）の悪水湛水が特にひどく、このことから悪水排除をめぐって、輪頂部（上郷）輪端部（下郷）の対立を生みました。これらの水災除去は、明治に入り、動力排水機が取り入れられるまで待たねばなりませんでした。

掘抜井戸と株井戸制度

下郷では水が多すぎること悩んだのに対し、上郷では部分的にはあれ灌漑用水を必要としていました。江戸後期には掘抜井戸が開発されましたが、上郷からの農業用水の排出は下郷の悪水となつてたまり、一大脅威を与えました。この問題の解決策が「株井戸」と称する制度で、下郷は上郷の村々に樋門の建設費や管理費を負担させたり、井戸の本数を制限するなど、様々な契約を結びました。この制度も排水機が設置されるまで続けられました。

田舟農業

田舟型の掘田では、耕地の境目に流れる細長い掘潰れが、悪水路と結んで本線と支線の役割を果たしました。これらの堀や水路は交通上の動脈であり、田舟による水路交通が主役でした。農家には最低1〜2艘の田舟があり、農作業の往来や農具・肥料・収穫物の運搬に欠かせない交通手段。農閑期になると淡水魚漁獲の漁師舟にも利用され、時には嫁入り道具の運送にも田舟が活躍しました。

しかしこの堀や水路も、田植えの時期になると水田一面に水がたたえられるため、掘上げ田と掘潰れとが区別しにくくなります。そこで堀を維持するため、鉄製の「鋤簾」を使って堀に接する水田の縁に置土しました。この作業はめんつけ（大垣輪中）、めんどうひき（高須輪中）などとも呼ばれましたが、掘潰れ内の泥土は肥沃であるので、これを水田全体に撒布れば、単に水田面を高くする効果があるだけでなく、水稻の生産力向上に役立ちました。

すすむ土地改良

明治の改修工事で以降、各河川の改修工事が行われる一方、西濃地方初の機械排水機が明治27年に設置され「低湿地農業の一大革命」というほどの効果を挙げています。排水機による排水改良は湿田を乾田にし、二毛作を可能にしましたが、輪中全域に渡った用水確保が急務となり、政府は大正12年に用排水幹線改良事業補助要綱を策定、各地に用排水改良事業が施行されました。

昭和に入ると、治水及び土地改良事業は有機的に計画、施工され、昭和29年から44年にかけて輪中の埋め立て工事を施工、昭和28年から始まった掛斐川浚渫工事の土砂を利用した掘潰れ地の埋め立てが行われ、その結果、輪中特有の景観である掘田及び掘潰れは姿を消すことになりました。こうして輪中地域は豊かな穀倉地帯に成長しました。

株井戸分布図



輪中地帯の水防意識とその精神性

洪水と闘い内水排除に尽力した輪中地域では、地域に根差した独自の気質が育まれています。

いわゆる輪中気質で結ばれた人々はその固い結束力で、容赦なく襲いかかる水難に立ち向かうことができたのでしよう。

この輪中気質について前回に引き続き伊藤安男先生に語って頂きました。



花園大学文学部教授
伊藤 安男 先生

対岸の輪中が破堤入水し死にもの狂いで水と闘っているとき、こちらの輪中では難を逃れて、手をとりあつて喜んだという話をききます。

輪中は囲堤集落であり、運命共同体ともいう水防共同体を形成してきました。反面では隣接する輪中とは利害が相反するたため、しばしば対立抗争し流血惨事となることすらありました。また水除堤の輪中堤をもたない村々が、新規に輪中を築立しようとする、古くからの輪中が反対の障りを申し立て、数十年間の論争の上によりややく輪中が成立しています。

この論争を輪中水論と称し、この水論をめぐる抗争が輪中根性（気質）という特異な思惟を醸成することとなりました。

今回は岐阜県羽島郡柳津町の松枝輪中の畑繫堤に例をとり、小さな輪中が成立するまでの苦難の道のり、その過程の中で輪中気質とはなにかをご理解していただきたい

して任せられることにより、松枝輪中と加納輪中との対立抗争史に終止符をうつときがきます。

酒井代官は堤方役所と障り村々の間にたち、慎重かつ献身的な態度で調停策を打ち出し、四五年目の文化八年（一八二二）によりややく松枝輪中が成立しました。最後に酒井代官の語を引用してこの稿を終わりたい。「天のものを愛するや一視同仁 独り加納領の民のみ天下の民にしてその他は天下の民に非ざるの理なし」

伊藤安男（いとうやすお）
花園大学文学部史学科教授、日本地理学会評議員、岐阜地理学会会長及び岐阜県郷土資料研究評議会会長。輪中研究にて岐阜県芸術文化奨励賞受賞。
主なる著書「輪中」「長良川を歩く」「岐阜県地理あるき」など。
主なる論文「輪中の災害と治水」「輪中の水論」「蘭人技師テレーケと砂防」「明治前期の治水思想」「木曾川改修工事とその前史」など。



▲十六輪中と周辺村々との対立和解の熟談交換証—明治 17(1884)年— (大垣市図書館蔵)

と思います。

旧木曾川の流路の境川中流部にある松枝輪中は、江戸時代中期までは上流部よりの溢水のみを防御する水除堤だけの尻無堤（馬蹄形輪中）でした。それが宝暦治水の大樽川洗堰築造以降に長良川の常水位が上昇したため境川の水行が悪くなっただけでなく、長良川出水時には逆水が境川上流部におよぶようになりました。そのため、松枝輪中の尻無の無堤地より逆水が流入し、年々水腐場となつて被害が増大してきたので、この無堤地に逆水防止の水除堤、境川受堤を築立するため明治四年（一七六七）に、笠松の堤方役所に願ひ出しました。

この新規水除堤築立の願出は、既成の加納輪中が強く反対の障りを申し立てたため、吟味差止めとなりました。工事中止となつて十数年後の天明三年（一七八三）に、住民は耐えかねて無願工事を強行することとなりました。



▶新しく柳津町の史跡に指定された畑繫堤跡（昭和60年伊藤安男撮影）

この工事に加納輪中は堤方役所に訴え、その結果に見分取払いを命ぜられた上に、四人の犠牲者まで出すにいたりました。この水論に松枝の人々は、これは高畑と高畑との間の水田を埋め立て畑にしただけにすぎなく、新規水除堤ではないとして畑繫論争を主張し、文化二年（一八〇五）に再び無願工事を断乎強行しました。この輪中地域の人々の水に対する血涙の悲願をみるることができます。

文化年間の無願工事に加納輪中は再び訴え、取払いを命ぜられますが松枝の人々は、畑繫堤にすぎないと主張して、ただちに取払うことなく次のように再度築立願を出して悲痛な訴えをしています。

「…家居迄逆水深盛上…高知之場所へも難逃去 乍居溺死当然にて…御哀憐御厚情以右願之通 逆水除御普請被成下置候…」として

このような水論のさなかに酒井七右衛門が川並奉行兼北方代官と



▶松枝輪中成立に尽力した酒井代官を祀る畑繫太神宮（昭和52年伊藤安男撮影）

木曾川文庫だより

いよいよ待ちに待った夏休み、木曾川文庫周辺の川辺では、ジェットスキーやウインドサーフィンなど、マリンスポーツが花盛り、若者たちの歓声でにぎわっています。また、多彩なイベントも行われます。木曾川文庫を見学した後は、リバーサイドウォーキング。ご家族で、お友達同士で、皆様のご来館をお待ちしています。

イベントスケジュール

- 7月24日／桑名水郷花火大会
- 8月1日／水郷まつり
(伊勢大橋下流)
- 8月7日／桑名総おどり
(木曾川河川敷押付地区)
- 8月24日／長良川国際トライアスロン
(国営木曾三川公園・長良川河川敷)

BOOK TALK



ふるさとの宝もの **輪 中**
著者 赤座憲久 河合 孝 伊藤安男
発行 株式会社じゃこめてい出版

海抜ゼロメートル地帯に形成された輪中は、水との闘いの歴史。独自の生活形態や風習を築き上げています。その輪中地帯の現状を、写真と文章、論説で描写する貴重な一冊。児童文学者である赤座氏は繊細な文章で、写真家の河合氏は輪中の変遷を、地理学者の伊藤氏はその成り立ちや風習を、それぞれの立場から克明に描いています。

神祇様の霊水

木祖村藪原

時は元禄14年、この京都では疫病が大流行しました。ちょうどこの頃、一風変わった一人の男がおりました。

この人は神祇様と呼ばれ町民を集めては「今、京の町に疫病が流行するのは山々の木を乱伐したためである。乱伐は洪水を招き、飲み水も汚染した。これは天の恩、地の恩を忘れ、神々に背いた罰。今こそ自然を大切にせねばならぬ」と説法を繰り返し、病人には薬草を煎じて与え、たいそう敬われておりました。

ある日のこと、住吉神社の石段に腰を下ろして休んでいるうち、神祇様は、いつの間にかとうとう眠り込んでしまいました。すると、夢の中に

住吉神が現れて

『お前の行いは、大変感心だ。しかし、困っているのは京の人だけではな
いぞ。遠く信州木曾の人々は、山中に住みながら地形が悪いため飲み水にも
事欠き、川の水を飲み、病人が続出している。この境内にある柳の枝を折つ
て杖とすることが良い。木曾川に沿って上れば、必ずその村に行き着くこと
ができるだろう。そして、そこに杖を差し込んでみるのじゃ。念ずればたちま
ち法水が湧き出し、村人たちを助けることができるだろう』と告げました。
夢から覚めた神祇様は、早速お告げに従って旅に出ました。そしてたど
り着いたのが、鳥居峠の麓・藪原。神祇様は早速クズ沢の下流、木曾川に合

流する地点の南側の崖っぷちに、柳の枝を差し、穴を開けてお経を唱えま
した。しばらくすると不思議なことに温泉のように暖かく、飲めば素晴ら
しい味わいの水が湧き出したのです。村人たちは躍り上がって喜びました。
その後、神祇様はその清水の脇に庵を作り、薬草をその清水で煎じた薬
を与え、村の病人を救って暮らしたそうです。
藪原にクズ沢の下流、木曾川との合流点の南側には、現在でも、美しい
清水がこんこんと湧き出しています。

●木曾川文庫利用案内●



- 《開館時間》 午前9時～午後4時30分
- 《休館日》 毎週月曜日・祝祭日・年末年始
- 《入館料》 無料
- 《交通機関》 国道1号線張大橋から車で約10分
名神羽島I.Cから車で約30分
東名阪長島I.Cから車で約10分

《お問い合わせ》
船頭平閘門管理所・
木曾川文庫
〒496 愛知県海部郡
立田村福原
TEL(0567)24-6233



編集後記

野外歴史地理学研究会(大阪国際大学内)一行70名が去る5月30日、木曾川文庫と船頭平閘門を視察されました。案内役は花園大学の伊藤安男教授で、閘門の仕組みなどを見学されました。

Vol.7 編集に当たっては木祖村役場の皆様のご協力をいただき、誠にありがとうございました。次回は海津町と宝暦治水を特集します。ご期待ください。

(表紙写真 全体:木曾川源流
(木祖村提供)
中窓:鳥居峠わらじ旅)